

追放^{された}元[→]聖女^{は、}

冒険者として自由に生活します！

Tsuiho sareta moto seiyo ha
bokensha toshite jiyu ni seikatsu shimasu

2

夏灯みかん

[Illust] しんいし智歩

Character Introduction

エイダン

レイラを追放した
キアーラ王国の王太子。
魔物に苦しむ
国民を救おうと
奮闘する。

ハンナ

キアーラ王国の公爵令嬢。
エイダンの恋人で、
かつて嘘をついて
レイラを追放させた。

テオドール

ナターシャの夫でノアの父。
教会で子供たちを
引き取って育てている。

ライガ

ステファンの相棒。
狼憑きで、人と狼、
二つの姿に
変化できる。

ステファン

ライガと共に
旅する冒険者。
レイラを妹のように
大切にしている。
魔物に詳しい。

ノア

レイラの友人。
大工の見習いで、
宮殿修理のため
王都へ出張中。

ナターシャ

ノアの母。
冒険者ギルドの所長で、
面倒見がよく
腕っぷしが強い。

レイラ

キアーラ王国の元聖女。
国外追放されて冒険者となった。
その出生には秘密があり……？

第一章 元聖女を追放した王子も追放されました

夜の街道を、白塗りの豪華な馬車が静かに走っていく。馬車の上では女神像が微笑んでいる。その車内では——黒い囚人服を着せられた元王太子エイダンとその恋人ハンナが、手を縛られ、揺られていた。

二人を一瞥し、ミハイル大司教は深く溜め息をついた。

「まったく、王子に謝罪までさせて迎えに行つてやったというのに、可愛げのない娘だ——」
ミハイルにとって、レイラが「戻らない」と言い切ったのは意外だった。あの娘は今まで一度たりとも、自分に逆らったことがなかったはずだ。

道中、悪態をつきすぎたせいで口輪をされたエイダンは、揺れる馬車に身をゆだねていた。

（無駄足だったじゃないか！）

牢に入れられた時、ミハイルは言った。

レイラに謝罪し、戻らせろ。さもなくば、お前もハンナも国外追放だ、と。

父王はすでにミハイルの側につき、自分の言葉には耳を貸さなかった。

——ならば、ひとまず従うしかない。キアラの魔物被害を止めるには、レイラの力が必要だ。

（この移動の間に、どれだけの民が犠牲になっていると思っているのだ）

骨になった農夫の姿がよぎり、エイダンほざきつと口輪を囁んだ。

その隣で、同じく粗末な囚人服姿のハンナは終始怯えたように、縛られた手を見つめている。

——外が完全な夜の闇に包まれた頃、不意に馬車の進路が変わった。街道を外れ、道もない草むらへ突っ込んでいく。がたがたと馬車が激しく揺れる。そのまましばらく進むと、ミハイルは馬車を止めさせた。

馬車の扉が開き、神官たちがエイダンたちを馬車の外に引きずり出す。

「——ッ、——！」

「ど、どこへ連れていくのですか！」

ミハイルは困惑する二人を、街道から離れた草原に投げ捨てた。

「お前たち二人は聖女を追い出し、キアラを危機的状況にした罪で、国外追放だ」

「——ッ！」

「お話が違うではありませんか、大司教様！ エイダン様と私は、レイラに謝罪しました!!」

口輪をされて喋ることができないエイダンの代わりに、ハンナは涙声でミハイルの足元に縋った。それをミハイルは足で払いのけ、二人に告げる。

「私は最初から、『レイラが戻ってくるのなら』国外追放まではしない、と言っていたはずだ」

ミハイルは土まみれになった二人を見下ろすと、馬車に乗り込んだ。

「お待ちください、大司教様！」

ハンナは馬車に縋りついた。カシャン、と音を立てて窓が開く。顔を出したミハイルが、意味ありげに笑ってエイダンに告げた。

「エイダン、キアラは安心して私に任せてくれ。私とて——私の国土を魔物に荒らされるのは困るのだ。対応はするよ」

そして口元に笛のようなものを当てて、それを吹いた。

——ピイイイイ……

笛の音が周囲に響き渡る。

「それでは」

窓が閉じられ——馬車は街道のほうへ戻っていった。
置き去りにされたハンナは呆然と馬車を見送る。一方、エイダンは近くの森をじっと見据えている。闇の中、森の奥から狼の遠吠えが聞こえた。

——笛の音は、暗闇に潜むものを呼び寄せるには十分だった。

「エ、エイダン様あ……」

ハンナは縛られた手のまま、縋るようにエイダンの粗末な上衣を掴んだ。エイダンは森を睥睨のまま立ち上がる。そして同じく縛られた手でハンナを立たせると、馬車が去っていった方角——街道のほうへ押し出し、顎で「走れ」と促した。

また、獣の遠吠えが聞こえた。それは先ほどよりもはっきりと聞こえ、狼の声だと判別できた。

（近づいてきているな）

不安そうに振り返りながら街道へ向かうハンナと森とを見比べ、エイダンも駆け出した。

（こんなところで、獣の餌^{えさ}になってたまるか——！）

エイダンは口に回されたロープをぎりりと噛みしめた。

再び森に目を向けると——月明かりの届かない木々の間に、動くものがあった。

灰色と白の狼が二匹、こちらへ駆けてくる。

（速いっ）

そう思った時には、タタタタッと獣が地面を蹴る足音が、もう耳元まで迫っていた。

（畜生、間に合わないか——）

「ンンン、ンンッ！」

エイダンは少し先で彼を振り返り硬直しているハンナに、「ハンナ、行け」と叫ぶと、狼のほうへ向かって逆走した。

「エイダン様っ!?」

ハンナの金切り声が草原に響く。自分たちのほうへ向かってくるエイダンを見た狼たちは、一定の距離を保って彼の周りを取り囲んだ。

（僕が狼を引きつけている間に、ハンナは街道につけるだろう）

エイダンは地面に身を投げ出し、目を閉じた。

——こうなったのは全部、自分の責任だ。

ハンナの言葉を信じ、レイラを追い出した。レイラは大司教の手駒で、ハンナに嫌がらせをして

いるのだと、勝手に決めつけて。

……だが、嫌がらせは嘘^{うそ}だった。レイラもまた、ミハイルの思い通りに動く人形ではなかった。

その結果、キアラには魔物が溢れ、罪もない農夫たちが犠牲になっている。

（ここで狼に喰^くわれるのも、自業自得か）

狼たちはじりじりと間合いを詰めてくる。

（まさか、父上が……僕をこのように切り捨てるとは）

牙を光らせた灰色の狼がぐると喉を鳴らして身を屈^{かが}め、地面を蹴って飛びかかってきた。身体が灰色の毛の塊^{かたまり}に押し倒される。エイダンは目を瞑^むったまま心を落ち着かせようとしたが——できなかった。沸^わき立つ怒りを抑えきれず、カッと目を見開く。

（実の息子より、あのクソ大司教を選びやがって！ クソクソクソ父上!!）

喉を狙ってくる牙に向かって、縛られた腕を前に出す。牙が皮膚を切り裂き、肉を貫く。そして——激しい痛みが身体を駆け巡ると同時に、縛られていた腕がふわりと解放された。

灰狼の牙が、腕を縛っている縄の結び目を噛み切ったのだ。

「ンンンンン、ハッハハハハハハハハハ！」

痛みと怒りとおかしさが一気にこみ上げ、エイダンは笑い出した。口輪の隙間から漏れた甲高い笑い声が闇夜に響く。灰狼は驚いたのか、牙を抜いた。

（——こんな荒野で、大司教の思い通りに死んでたまるかッ！）

再び灰狼が飛びかかる。エイダンはその首にしがみつき、解けた縄を乱暴に巻きつけた。

(僕が招いたことだ！ 生き抜いて、自分で始末をつけてやる!!)

振り向きざま、背後から迫った白狼の口へ灰狼の頭を押し込む。白狼の牙が仲間の頭蓋を噛み砕いた。

——ギャウ！

灰狼の断末魔が響く。エイダンは縄をゆるめ、仲間の血で口まわりを赤くした白狼の首に巻きつけると、その身体を地面に押し倒して縄を締め上げた。白狼は強い力で抵抗し、暴れまわる。

最初に噛まれた腕の傷から血が噴き出して、痛みで力がゆるんだ。これ幸いと白狼は縄を振りほどき、エイダンめがけて噛みつこうと体勢を整えた。

(——まずいッ)

その刹那——

「私のエイダン様から離れなさいい！」

ハンナの金切り声が暗闇を裂いた。彼女が投げつけた拳大の石が、白狼の頭を直撃する。

白狼は鳴き声を上げて、バランスを崩した。

「ン——ッ！」

エイダンは口輪の奥から叫びながら、そばに落ちた石を拾い上げ、狼の頭を殴りつけた。石は狼の頭蓋を潰し、断末魔が響き渡った。

相手が動かなくなったのを確認し、大きく息を吐いてから立ち上がって、口輪を外した。

「エイダン様あ、ご無事ですかあ……」



顔を上げると、ハンナが腰を抜かしながら泣いていた。エイダンが彼女に近寄り、腕を縛っている縄を解いて抱きしめた。

「……逃げると言ったらつもりだったのに」

「ご無事でよかったです……」

「無事では……ないが……。君のおかげで命拾いした」

エイダンは息を吐き、真剣な顔で付け加えた。

「……助かったからこそ、言うぞ。人を貶める嘘は、もう二度とつかないでくれ」

「……ごめんなさいい」

エイダンは自分の服を割いて腕の傷を縛ると、座り込んだままのハンナを立ち上げさせた。

「早く街道に向かおう。——キアラには戻れぬ。ひとまずマルコフ王国に戻るぞ」



大司教様がエイダン様とハンナ様を連れて謝罪に来た日から、三日が過ぎた。

夕食後——私は宿の部屋でベッドに腰かけ、大司教様に渡された小さな水晶玉を見ながら溜め息を吐いた。この水晶玉のことは、ステファンやライガ、ナターシャさんには話していない。

大司教様とどんな話をしたのかまで聞かれそうで、なんとなく気が引けたからだ。

『お前の内面は、他を顧みず自己の欲求に忠実な——魔族そのものなのだ』

大司教様の言葉が頭に響く。

——人のことを好き勝手に言って！ 自分が欲深くなったのは私のせいだとか、キアラの人たちが大変なことになっているのも私のせいだとか。全部私のせいにして！

私はぎりりと奥歯を噛みしめた。

『——お前が誰に見捨てられようと、私は待っている。私だけは、お前を受け入れてやれる』

——大司教様になんて、待たれたくない！ もう私に構わないで、ほっといて！

水晶玉を握りしめる手に思わず力が入る——その瞬間、手のひらがぶわっと熱くなった。

「わっ」

思わず手を離すと、小さな水晶玉は床に落ちて転がった。

拾おうと手を伸ばした時、自分の服の袖が焦げているのに気がついた。

——焦げ？ ……火？

『機嫌を損ねると瞳を赤く光らせて周囲の物を燃やす』

私は思わず机の上の鏡を覗き込む。そして、思わず息を呑んだ。

……私の瞳は緑だ。けれど今は、その輪郭が赤く光っている気がした。

慌てて鏡に顔がくつつくくらい近づけて見ると、そこにはいつも通りの自分の瞳があった。

——見間違い？

心臓が、うるさいくらいに鳴っている。

祈る時のように胸の前で手を合わせて目を閉じ、祈りの言葉を唱えて心を落ち着かせた。

ゆっくり目を開くと、胸に手を当てる。

今、なにが起きたの？ 炎を出した？ ステファンの話だと、私、耳がないとそういう風に炎を出したりできないはずだね？ それに——今、私、怒ってた？

心を落ち着かせたはずなのに、大司教様の言葉を思い出すと意識がぐちゃぐちゃになる。イライラして、考えがまとまらなくなる。こんな感覚は初めてだ。

神殿では、祈っているうちに一日が終わった。寝て、起きて、祈る。それだけだったから、自分の感情をじっくり考えることなくてなかつた。

神殿を出てからは、毎日が新しくて、楽しいことばかりだった。

——だから、胸の中がどろどろして爆発しそうになるのは、初めてだった。
この前、カフェでソーニャと話した時のことを思い出した。

『……あなたはちよっと、ステファンに似ているわね』

『ステファンも、怒らないじゃない？』

ソーニャ、全然似てないよ……。私、普通に怒るみたい……

冷や汗がたらりと額を伝った。それに、私が魔族だと大司教様が言った時の、領主様の反応。

『その子が魔族とはどういうことだ？ 聞いてないよ！』

まるで、魔物を怖がる農家さんみたいだった。あれが、魔族に対する普通の反応なの？

もし——ステファンやライガ、ナターシャさんが、あんな風に私を見てきたら？

胸の奥が、ずっと冷たくなった。

——嫌だ。

あんな目で、みんなに、見られたくない。

——ああ、これが、『怖い』だ。

私ははつきりと、その感情を初めて感じた。

みんなにあんな目で見られることが、私は『怖い』。

「怒ったら、駄目」

私は自分に言い聞かせるために呟いた。

『なるほど、お前は一見かわいらしく無邪気な少女かもしれない』

大司教様の言葉がまた頭の中を巡る。

——みんなが領主様みたいに私を怖がらないのは、きっと私のことをそう思ってくれてるから。
かわいらしく、無邪気で……そういう風に、振る舞わないといけない。

その時、トントントンと部屋扉がノックされた。

「レイラ。夜にごめんね。まだ起きてる？」

ナターシャさんの声だった。私は深呼吸して笑顔を作り、扉を開けた。

「起きてますよ！ なんででしょうか？」

扉の先には困り顔で耳を垂らしたナターシャさんがいた。

「門番が冒険者ギルドに来てね。街の入り口に身分証もなにも持っていない、黒い囚人服の二人組が来ているそうさ。で、身元を証明する人間として……レイラを指定したらしい。エイダンとハン

ナと名乗っているみたいなんだけど、あの王子とその恋人だよね？」

「エイダン様と、ハンナ様が？」

びっくりして、思わず大きな声が出た。二人はもう、大司教様とキアラへ帰ったはずじゃ……

「悪いけど、来てくれない？」

私はナターシャさんと一緒に宿屋を出て、街の入り口である門に向かった。

——外はしとしと雨が降っていた。フードを打つ雨粒が、ぼつぼつと音を立てる。私は水の溜まった石畳をばしやばしやと鳴らしながら、小走りで門に向かった。

……エイダン様とハンナ様が、どうしてお二人でまたこの街に……

私は領主様のお屋敷で見た、変わり果てた様子の二人を思い出していた。ぼろぼろの黒い服に、痩せてやつれた顔——キアラで見えていた頃からは想像もできない姿だった。

「連絡ありがとう。この子がレイラだ」

門に着くと、ナターシャさんは眉間に皺しわを寄せた門番さんの前に私を押し出した。

「この二人なんですが……」

門の横にある、門番さんの待機室へ連れていかれる。その部屋の隅に、びしょびしょに濡れた髪を顔に張りつかせ、丸まって座る二人の姿があった。

「ええええ、エイダン様っ？ ハンナ様っ？」

領主様のお屋敷で見た時より、さらに変わり果てていた。黒い服はところどころ裂けて泥だらけ。エイダン様は髭ひげだらけで、ハンナ様は唇を紫にして震えている。二人とも裸足はだしで、足は血だら

けだ。……ぱつと見では、誰だかわからないほどだった。

ハンナ様は私を認識すると、目に大量の涙を浮かべて駆け寄ってきた。

「——来てくれて、ありがとおお」

あまりに泥だらけで思わず飛びのいて避けると、ハンナ様はそのままドンツと壁にぶつかった。

「——ど、どうなさったんですか？ キアラにお帰りになったんじゃ」

壁に寄りかかったままのエイダン様が、消え入りそうな声で答えた。

「——途中で、捨てら……れた。国外追放……だそうだ……」

真つ青な唇がふるふると震えている。

「腕に獣に噛まれた傷があります。化膿かのうしているようで……一応、応急処置はしましたが……」

門番さんは困ったように私とナターシャさんの顔を見た。

「どうしましょう。街に入れてもよろしいでしょうか」

「——レイラがいいなら、アタシが許可を出すよ」

ナターシャさんは私を見た。

「も、もちろんです。早く教会か治療院へ……っ」

私はエイダン様に駆け寄ると、ぐるぐるに包帯を巻かれた腕を見た。かなり熱を持っている。腕全体が熱いのに、他の部分は冷たくなっている。こういう時、満足な回復魔法を使えない自分が嫌になる。

私は胸の前で手を組み、祈りの言葉を唱えた。回復はできないけど、痛みの緩和ならできるはず。

「光の女神様、この者の痛みと苦痛を取り除き、安らかな平穏をお与えください」

すーっと光がエイダン様を包むと、エイダン様はむくりと立ち上がった。

「エイダン様ああ」

さつきからずつと泣き続けているハンナ様がエイダン様に駆け寄った。エイダン様は自分の腕をじつと見る。

「これは――痛みがなくなった……？」

「傷は治ってないですからね！ あんまり動かないでくださいね。とりあえず、治療院へ。エイダン様、歩けますか？」

「歩けるぞ」

「後の処理はやっておくから」とナターシャさんが言ってくれたので、私は二人を連れて治療院へ急いだ。

治療院はテオドルさんの教会のすぐ近くにある。回復魔法を専門にする治療師^{ヒーラー}さんが、怪我や病氣の人を診てくれる場所だ。呼び鈴を押すと、出てきた治療師さんは「腕を診てほしい」と言うエイダン様に困ったような顔をした。

「――夜間なので、お急ぎでなければ、朝に――」

「さつきまで、さつきまで死にそうだったんですっ！」

ハンナ様が泣きながら治療師さんに縋った。

治療師さんは「やれやれ」といった風にエイダン様の腕を取り、顔を近づけて、表情を変えた。

そして焦ったようにまくしたてる。

「よくこの傷でそんな平気な顔していますね!? 早く処置しないと！ 腕、なくなりますよ!!」

奥からバタバタと他の治療師さんも出てきて、エイダン様はあつという間に奥に運ばれ、ベッドに寝かされてしまった。

「治療費、それなりにかかりますが……よろしいですか？」

治療師さんが私とハンナ様を振り返る。ハンナ様は「ちりようひ……」と呆然と呟いて、泥だらけの手をじつと見つめた。その時、祈りの効果が切れたのか、エイダン様の顔色が急に悪くなり、「つ、う、が」と声にならない声を上げはじめた。

「レイラ――」

ハンナ様は真っ白になった顔で私を見つめた。――それから、治療院の床に手と頭をついた。

「お願いします。お金を貸してください。嘘について、あなたにひどいことをして、本当にごめんなさい。エイダン様が死んじゃう――」

治療師さんたちが、何事かという顔で私とハンナ様を交互に見る。

私は恥ずかしくて、顔が熱くなった。

ちよつと、これじゃ私がこの二人になにかしたみたい……

「もちろん、そのつもりですから！ 頭を上げてください!!」

私は治療師さんたちに「お願いします」と頭を下げた。

ハンナ様もところどころ傷があり衰弱していたので、二人とも治療院に預けて私は宿屋に戻った。



——翌日。私はナターシャさん、ステファン、ライガと一緒に治療院を訪れた。

エイダン様はベッドに寝ていて、ハンナ様はそのそばに腰かけていた。二人とも、白いワンピースみたいな寝間着姿だった。私たちが行くと、二人は同時に頭を下げた。

ハンナ様は泣きそうな顔で口をもごもごさせるばかりだった。その背中を撫でて、エイダン様が口を開く。

「昨日は助かった。なんと礼を言えいいかわからないが……ありがとう」

みんなが私の返事を待っている気がして、私は言葉を探した。

「いえ、とにかくお二人ともご無事でよかったです」

後ろからライガが、二人の顔を見まわして付け加えてくれる。

「お前らの治療費はレイラが立て替えてる。ちゃんと払えよ」

……言いにくかったけど、治療費は思ったより高かった。今まで貯めたお金がかなり減ってしまったから、そこはちゃんと言わないといけない。

ライガ、私の代わりに言ってくれてありがとう。

「——もちろんだ」

エイダン様は再度頭を下げた。ハンナ様は涙でぐちゃぐちゃになった顔を、ちょこんと下げた。

ハンナ様、なんでそんなに泣いているの。

——ああ、もう、この二人、いつまでこうやって頭を下げてくるんだろう……

「もう、もういいですから、本当に。今後、私に頭を下げないでください」

ハンナ様はずびずびと鼻をすすする。

「……いいの……？　だって、だって私、嘘をついて、あなたを追い出して、それで魔物がたくさん出て……。屋敷に大司教様たちが来て、連れていかれそうになっても、お父様もお母様も止めてくれなかった……」

私は遠い目をした。ハンナ様の洪水のような言葉は続く。

「……夜の森に放り出されて、狼が襲^{おそ}ってきて、本当に怖かった……。そこから街までずっと歩いて、やっと門に着いたのに、入れなくて……。どうしたらいいのかわからなくなつて、あなたの名前を出してしまったのに……」

いろんな話が出てくるから、なにを言っているのか半分くらいしかわからなかったけど——

「いいですよ、もう」

私は笑顔を作り、語調を強めて言った。

……あと、初めて人に対して「面倒くさい」って思った。

これも、初めて感じる気持ちだ。人と関わるのって、大変だ。

「で」

ナターシャさんが「本題に入る」と言うように口を開く。

「アンタたち、これからどうするの？ 身体治ったら、この街から出ていく？ それによってアタシも領主様に伝えなきゃいけない」

「このまま、しばらくこの街に滞在させてもらいたいと思っている」

エイダン様は私たちを見まわした。

「この街やお前たちに迷惑をかけるつもりはない。だが、僕はキアラを捨てるつもりもない」

「捨てる？ お前が捨てられたんじゃないのか？ 国外追放だろ？」

ライガが鼻で笑って口を挟む。

「確かに、僕は国外追放だそうだ。父上は——僕を切り捨て、大司教を選んだ。……クソ父上だ」

エイダン様は吐き捨てるように言った。

「父上が自分の意思で僕に国外追放を言い渡したのなら、まだいい。だが実際は、大司教に言われるがままだ。大司教も腹立たしいが、父上はそれ以上に腹立たしい。国王ともあろう者が、自分の意思もなく神殿に従うだけなど!!」

「しかし!」とエイダン様は声を張った。昨日よりだいぶ元気そうだ。

「僕はキアラを捨てるつもりはない。——このまま父上に任せたままには、できない。新しく王太子になった弟はまだ十歳で、なにもわからぬ。このままでは大司教の思う通りではないか」

エイダン様は包帯を巻かれた右腕をぐっと握りしめた。傷口が開いたのか、白い包帯に血が滲^{にじ}みただけだ、エイダン様はそのまま声を荒らげた。

「僕は必ず戻ってやる!」

「威勢^{いせい}がいいのはいいんだけどね、この街で宣戦布告されても困るんだよ」

ナターシャさんは困ったように耳を触った。

「すまない。迷惑をかけるつもりはないんだ。だが、しばらくの間、今後を考えるためにも、滞在を許可してもらえるとありがたい」

「滞在して、どうしたいんだ？」

「ひとまず、魔物について知りたい。先日、僕はキアラで初めて魔物を見た」

エイダン様は思い出したように不快そうな顔をした。

「……気味が悪かった。キアラの兵士は魔物の対応に慣れていない。今後のためにも、魔物の対処方法を知らねばならない。だから——」

それから私たちを真っ直ぐに見据えた。

「お前たちは普段、魔物を相手にしているんだろう。戦い方を僕にも教えてもらえないだろうか」

「教えるって……どうやってかな？」

ステファンが首をかしげる。

「お前たちの魔物退治に同行させてもらいたい」

「同行？ 僕らの仕事に、ただついてくるのか？」

ステファンはさらに首をかしげた。エイダン様は言葉を詰まらせながらも、言った。

「もちろん、僕も働く。剣の腕には自信がある」

「……『僕も』？」

しばらく沈黙した後、エイダン様はステファンに頭を下げた。

「――僕に、お前たちがやっている魔物退治の仕事をさせてもらえないだろうか。そして、僕の事に、ついてきてくれ。……仕事を、教えてほしいんだ」

続けてなにか言おうとしたステファンをナターシャさんが制止する。

「冒険者登録して、うちの魔物退治の仕事をやる気があるってことでいいかい？ キアーラ付近の街道で魔物が出るようになったせいで護衛仕事が多くて、人手が不足しているから。まあ、働いてくれるならそれでいいよ」

それからぼんつとステファンの肩を叩いた。

「ステファン、新規登録の冒険者の指導はしてくれるよね、いつもみたいに」

ステファンは少し黙ってから、笑顔でうなずいた。

「……構いません。いつも通り、報酬の配分は僕たちを多めにしてくださいね」

ナターシャさんは「わかってるよ」と苦笑いしてから、エイダン様に向き直った。

「それじゃあ、退院したら冒険者ギルドに来て。キアーラについて、聞きたいこともあるし」
「構わない」

「――私は、どうしたらいいの……？」

それまで会話を見守っていたハンナ様が口を挟んだ。

「レイラ――、私たち、ここを出たら、泊まるところはあるのかしら？ 屋根のあるところで眠れるのかしら？」

涙を溜めた瞳で私を見つめてくる。「そんな風に私を見ないでください」と言おうと思ったけど、ぐつとこらえた。心優しく、穏やかに対応しないと……

「――どこか、お二人が泊まれるところがありますかね？」

私はステファンたちに話を振る。

「そこまで気にかけてやるのか……。お前ら、レイラに感謝しろよ」

ライガはぎろりと二人を睨んでからステファンに聞いた。

「宿屋の使用人室が空いてたよな。誰か辞めて田舎に帰ったから、人手が欲しいって言ってたし」

「そうだね。女将さんに聞いてみようか」

ステファンがうなずくと、ハンナ様はだばーつと涙を流して私に駆け寄ってきた。今日はちゃんと綺麗だから、避けなくても――

「ありがとうおおお」

「わっ」

ハンナ様のぐちゃぐちゃの泣き顔が目の前に迫ってきたので、思わず身を引いてしまった。

……ハンナ様はそのまま壁にぶつかった。



「ステファン、準備ができたぞ」

それから数日後、冒険者ギルドにて。退院したキアーラの元王子、エイダンが僕の肩を叩いた。
「――それでは出発というか」

力強く言い切るエイダンに、僕は苦笑した。

武器や防具一式は僕のを貸してやっている。正直、そこまでしてやる義理はない。謝罪したとはいえ、レイラを独断で国外追放しておいて、ずいぶん虫がよすぎると思う。

けれど、受付でリルと話しているレイラは、そんなわだかまりなどないように見えた。

……彼らが国外追放にしなければ、レイラは今でもキアーラの大神殿にいたかもしれない。

――外の世界を知らないまま。

「エイダン様、行つてらっしゃい……。お怪我しないでくださいね……」

見送りに来たハンナが、潤んだ目元を押さえながらエイダンの手を握る。

……スライム退治に行くだけなんだけど。

僕はまた苦笑して、いつものライガとレイラにエイダンを加え、冒険者ギルドを出発した。

――スライムが大量に出ているという山奥の沢へ向かって、僕らは連れ立って歩いていった。ここ数日雨が続けていたので、久しぶりに晴れた朝の山の空気は爽やかだ。

手に持った鳥籠とりかごの中で、鶏けいが朝の鳴き声を上げる。バサバサと羽ばたき、白い羽根が舞った。

「それは――なにに使うんだ？」

エイダンが物珍しそうに鳥籠を覗き込んだ。

「餌にするんだよ」

「ステファン、鶏を魔物の餌にするの好きだよな。この前も使ってたし」

ライガのツツコミに肩をすくめる。

「別に好きじゃなければいいよ。よく騒いで魔物を集めてくれるから、使い勝手がいいだけだ」

「なるほど……」

エイダンは何度かうなずくと、立ち止まって小さく復唱した。

「よく騒いで魔物を集める……。よく騒いで魔物を集める……」

「どうしたんですか？」

レイラが首をかしげた。

「いや、忘れないように、覚えておかなくては」

僕たちは顔を見合わせた。

――やる気はあるんだなあ、こいつ……

「僕は、地方の討伐とうばつに行つて初めて魔物というのを見た。あれはなんなのだ？」

山道を登りながら、エイダンが僕に問いかける。

「魔物っていうのは、精霊の魔力を取り込みすぎておかしくなった動植物だ。攻撃的で、人の魔力を狙ってくるやつが多い」

――マンドレイクみたいに、気絶させるだけで直接襲うことはないタイプもいるけど。

エイダンが顎に手を置きながら、眉間に皺を寄せて呟いた。

「キアーラの村でゴブリンの群れと戦ったのだが、一体だけ他と違うやつがいた。農夫を喰ったら

しく、体も大きかったし、他のゴブリンを指揮していた。あれはなんだ？」

「魔物は、他の生き物の魔力を取り込むと変化する。……進化と言ったほうが近いかな。特に人を喰うと頭がよくなって厄介なんだ。中でもゴブリンは変化が大きい。たくさん人を喰ったゴブリンはオーガになる。オーガになると、言葉を喋ったり、ゴブリンを軍隊みたいに組織したりする。そうなる」と冒険者では対処できず、国が軍隊を出して、戦争みたいになる」

今は魔法使いギルドや冒険者ギルドが各地でこまめに退治しているから、オーガの軍勢が街を襲うなんて話はめったにない。

けれど昔は違った。僕の故郷の辺りでは、実際にオーガの軍勢に土地を奪われたことがある。

その土地を取り戻したのが父さんで、その武勇伝はいまでも語り草だ。

——僕には到底、そんなことはできないけれど。

森の中を進んでいくと、ごうごうと水音がしてきた。木々の間から、雨のせいでいつもより水かさの増した川が勢いよく流れているのが見える。

「だいぶ増水してんなあ……」

ライガが面白そうに呟いた。

——僕らがまだ実家にいた頃、こいつは嵐の日に荒れた川を見に行つて溺れかけたことがある。

この前釣りに行った時、レイラが流されかけたのを思い出して、はつとした。

水龍のロープを着ているから、溺れることはないだろうけど……

「レイラ、勢いがあつて面白そうだからつてあんまり近づくなよ。足をとられるぞ。俺も昔、溺れ

て死ぬかと思った」

——僕が言おうとしていたことを、ライガが言った。

経験者だけあつて、言葉に重みがある。レイラも真剣な顔でうなずいた。

「うん。気をつける」

「あの時、僕がロープ投げなきゃ、そのまま流されていたよな、お前……」

呟くと、ライガは「そうだな」と笑った。

その時、顎に手を置いて考えるポーズをしていたエイダンが口を開いた。

「スライムの発生は、川が荒れているのと……関係があるのか？」

……エイダン、結構鋭いな。

「そう。雨が降りたり嵐が来たりした後は、水の精霊の魔力が濃くなって、水辺に魔物がよく出るんだ。特にスライムが出やすい」

僕らは沢の横の開けたところ——木が茂っていないで日当たりのいいところに降りた。

「スライムは日差しが当たるところを嫌うから、ここで火を起こそう」

近くで乾いた枝を拾い集めて火をつけた。

「スライムは基本的に、焼いて倒すよ。魔法使いがいれば楽だけど……今回はエイダンに倒し方を教えるのが目的だから。キアラには魔法使いはいないもんね」

エイダンはうなずいた。……まあ、スライムは日常的に発生する魔物だから、毎回魔法使いを呼ぶわけにもいかないし、普通の対処法を知っていて損はない。

「私のお祈りもお休みですね」

レイラが残念そうに呟いた。レイラの祈りはちょっとイレギュラーだから……使ってもらえたら楽だけど、今回は控えてもらう。

リュックから松明^{たいまつ}を出して火をつけ、それから自分の口に布を巻く。

「スライムは口から身体の中に入ってこようとするとするから気をつけて。身体にへばりついてきたら、騒^{さわ}がず落ち着いて火を当てよう。そしたら離れるから」

「俺、スライム嫌いなんだよなあ。あいつら、匂いしないし、気持ち悪いじゃん」

「——で、スライムはどこにいるんだ？」

エイダン^{エイダン}は川辺に近づき、周囲を見まわした。レイラが彼の足元を指差す。

「エイダン様、足元——」

水辺から、両手に乗るくらいのおおきさの透明なぶよぶよした塊——スライム——が、にゅるっと出てきて、エイダンの足にまとわりついた。

「な、なんだ!？」

エイダンはそれを剥^はがそうと手を伸ばした。あーあ、落ちて着いて言ったのに。

スライムはエイダンの手から腕に移り、そのまま頭のほうへ移動を始める。

僕は松明の火を、エイダンの首元にへばりつくスライムに当てた。

じゅっと音がして、スライムはエイダンから剥^はがれて地面に落ちる。

僕は腰から短剣を抜くと、スライムの中心——少し白っぽい核を貫いて地面に串刺しにした。

「ちょっと色があるのが核だ。そこは剣が効くけど、他の透明なところは切っても無駄だよ」

そのまま松明の火を落したスライムに十秒ほど当てると、スライムはどろりと溶けて周囲に広がり、水たまりを作った。

中央には僕の親指の爪ほどの大きさの丸い塊——スライムの核が転がっていた。それを拾い上げ、焚^たき火のそばで目を大きく見開いているエイダンに向かって放り投げる。

「これで一匹、退治だ。この核が何匹退治したかの証拠になるから、忘れないようにね」

エイダンは僕が投げた核を器用にキャッチすると、「無論だ」とうなずいた。

「……教わったことは、しっかりと覚える」

重々しいエイダンの言葉に、僕は肩をすくめた。



「レイラ、騒^{さわ}いだせいか、他のスライムが出てきたみたいだ。少し下がろう」

ステファンが倒したスライムの残り水を覗き込んでいた私は、顔を上げた。

すると川辺から、他のスライムがうにようによここちらへ向かってくるのが見えた。

「うわあ……たくさん出てきました……」

呟くと、ステファンが手招きした。

「いったん、こっちにおいでよ」

私たちは日当たりのいい焚き火のほうへ移動した。

「思ったより多いな。——エイダンの勉強のためにも、少し実験してみようか」

ステファンは呟くと、リュックからお昼用の干し肉とトマトを取り出した。それを、川辺から出てきたスライムたちのほうへ放り投げる。

透明なぶよぶよたちは、一斉に干し肉に群がった。

「こういう風に、魔物は野菜より肉を好む」

三匹のスライムはごっちゃになつて肉を体内に取り込み、そのまま一つの大きな塊になった。

そして、ずるずると私たちのほうへ向かってくる。エイダン様が顔をしかめた。

「こいつら、一つになったぞ!? ……気味が悪いな」

「そう。さっき、ゴブリンがオーガになるって話をしただろ。魔物の変化は速いんだ。だから放置すると大変で、スライムも小さいうちは問題ないけど、放っておくと大きくなる。すごく大きいのはキングスライムって呼んだりするね」

私は、三匹が合体して大きな塊になったスライムをじーっと見つめた。

透明な身体の中に干し肉が見えた。

「スライムは食べたものをゆっくり溶かすから、中にしばらく残るんだ」

ステファンは剣でスライムの中心を地面に突き刺しながら、説明してくれた。

「そうなんですか！ 中が見えて不思議ですね……」

私が感心してうなずくと、ステファンは嬉しそうに、早口で説明を続けてくれた。

「口や傷口から体内に入られると中から溶かされるけど、すぐ処置すれば大丈夫だからね」

「——大丈夫なのか、それは。本当に気味が悪いな」

エイダン様は露骨に嫌な顔をして身震いした。ステファンはすっかり説明役の顔になっている。

「この前退治に行ったバジリスクもそうだけど、魔物は獲物をすぐに殺さない場合が多い。やつらはゆっくり、じっくり、獲物を苦しめて殺すんだ」

エイダン様が表情を歪めた。

「なぜそんなことを——？」

ステファンが待つていましたとばかりに「良い質問だね」と口を開いた。

「獲物の魔力を喰らうためだって言われている。魔力っていうのは感情とリンクしていて、怒ったり悲しんだり、感情が昂ぶると身体から発せられる魔力が大きくなるんだ」

感情が昂ぶると、魔力が大きくなる——もしかして、大司教様の言葉を思い出して手が熱くなったのは、私が『怒った』から？ ステファンの話は続く。

「前に話しただろう？ バジリスクに石化された人は、石になっている間も意識があるって。痛覚もそのままだしい。完全に意識がなくなると魔力の変動がなくなるから、あえて意識を残しているって話なんだ。な、ライガ」

話を振られたライガがうなずいた。

「絶対嫌だよな。石になってじっくり食べられるの」

エイダン様の眉間の皺が深くなる。ステファンは「うんうん」とうなずいて話を続けた。

「バジリスクは少しずつ、石化した獲物の表面を削^{けず}って食べる。バジリスクの舌はザラザラしていて、やすりみたいなんだ。それで石の表面を……」

うわあ、想像するだけでぞわぞわしてくる。そこで、ライガが「がうつ」と吠^ほえた。

「待て待て、ステファン。なんの話がしたいんだ？ ……エイダンが気持ち悪そうにしてるぞ」

エイダン様が青い顔をしている。……ライガって、結構他の人のことよく見ている。

「――醜^{しゅう}悪^{あく}な生物だな。魔物というのは」

「こいつ、ちょっとこういう……魔法使いみてえな、気持ち悪い^{わる}話が好きなんだ。悪いな」

ライガがステファンの肩を叩き、呆れ顔で言った。

「そんな言い方をしなくたっていいじゃないか。悪かったよ」

あ、珍しくステファンが拗^すねている。エイダン様は首を振った。

「いや……話としては興味深いぞ」

なんだか微妙な空気になったので、私は「はい」と手を挙げて口を挟んだ。

「――それで、スライムもバジリスクと同じで、じっくり生き物を食べるんですね」

ステファンは松明の火を大きくなったスライムに近づけながら話した。

「そう。……つまり、魔物は苦しんでいる獲物に強く引き寄せられるんだ」

そこで一度区切って、いつもの調子で言う。

「なにが言いたかったかというと、生きている餌のほうがよく集まるってこと」

じゅじゅつと音を立てて、スライムはまた水たまりになった。



ステファンとライガが、ざくざくと川辺に穴を掘っている。マンドレイクの時みたいに、鶏おびき寄せて穴に溜めるらしい。二人が穴を掘っている間、私とエイダン様は水辺からこちらに近づいてくるスライムを松明の火で溶かす役を割り当てられた。

「エイダン様、そっち行きましたよー」

「畜生！ こいつ！ 待て、こちら！」

うにうにと逃げるスライムを、エイダン様が松明片手に追いかける。

私の近くにも一匹来たので松明の火を近づけると、うににと横に逃げた。

……面白い……

私は松明の火をすれすれに近づけては、逃げるスライムを追いかけた。

こうやって逃げる姿を見ると、スライムもかわいいかもしれない……

大神殿の小部屋にいた時は、たまに部屋に入ってくる蟻^あくらいしか生き物を知らなかった。

外の世界には、いろんな魔物や生き物がいて面白いな……

しばらくスライムを追いまわしていたら、後ろからべちゃりとなにかが腕に張りついた。

え……なにっ!?

慌てて視線をやると、腕から顔のほうに向かって透明な塊が迫っていた。

しかも、後ろから別のスライムが飛びかかってくる!!

——口や傷口から体内に入ってきて、中から溶かされる……

ステファンが言ってたことを思い出して頭が真っ白になった。そんなの、絶対、嫌……!!

——いなくなつて!!

私はそう心の中で叫び、スライムを睨んだ。身体が熱くなる。

ぼうつ!

飛びかかってきたスライムが、目の前で燃え上がった。

「……えっ?」

燃えたスライムは空中で水滴すいてきになり、カランツと核だけが地面に転がった。

私は自分の手を見つめる。

……この前、宿屋で手のひらが熱くなった時と同じ……?

「レイラ! 大丈夫か!」

ステファンとライガがスコップを担いだまま駆けつけた。

「……全然、大丈夫ですっ」

私はぶんぶんと頭を振って、一歩下がった。

「……松明で焼いたの?」

ステファンが地面に転がったスライムの核を拾い上げて、首をかしげた。

「そう、そう。びっくりしました。急に飛びかかってくるんだもん……」

「そうか……。よかった、なにもなくて。悪いな、目を離してて」

ライガがぼりぼりと頭を掻かいた。

「でも、完成したぜ!」

どうだ、とライガが手で指した先には、真ん中だけ残して周りを丸く掘った穴があった。お城の周りのお堀みだ。

「よし、じゃあ、ちよつと可哀想だけど、こいつを餌にするか」

ステファンは籠に入った鶏を川のそばへ近づけた。

すぐに現れたスライムが、するとと籠の隙間から中に侵入し、鶏に襲いかかった。

コケ! コケコッコー!

鶏はけたたましく鳴いて、白い羽根を周囲に散らした。

ステファンはそれをさっきの堀の中央に置くと、私たちを近くの草やぶへ退がらせた。

息を潜めて河原を見つめる。

——すると、うにようにと透明な塊が押し寄せてきた。

鳥籠の中で暴れる鶏をめがけて集まったスライムたちは、そのまま雪崩なだれのように穴へ落ちていく。

「まとめて火をつけるよ」

ステファンはエイダン様に声をかけると、リュックから瓶びんを取り出した。左手に瓶、右手に松明。そして落ちたスライムたちへ瓶の液体を振りかけ、松明で火をつける。

ぼう! と火柱ひばしらが上がった。

近づいて見てみると、燃やされたスライムたちが溶けて水たまりを作っていた。

一部が、うにうにと逃れるようにこちらに向かってくる。逃げようと必死なのか、動きが速い。さつきみたいに身体によじ登られたら気持ち悪い。

——おとなしくして……こっちに来ないで！ 私は手を組んで目を瞑り、祈った。

「——逃げたやつは頼むって……言う必要なかったね」

ステファンの声で目を開けると、逃げたスライムは途中で力を失って動かなくなっていた。

はあ、と息を吐き、一匹ずつ落ち着いて火で溶かしていく。

最後に、まだ暴れている鶏を私が祈って無気力状態にした。ステファンは先端に干し肉をつけた木の枝を嘴から差し入れ、鶏の口の中のスライムを引き出して火で焼いた。

「後は、核の回収だな」

ライガが穴の中に溜まったスライムの核をシャベルで外に放り出すので、私たちはそれを袋に回収していく。スライムの核は白っぽい歪なカタチの塊だったけど、中にはかてかと白く綺麗に輝いているものがあつた。

「これ、綺麗ですねえ」

私がそれをつまみ上げて見せると、ステファンが「ラッキーだね」と笑った。

「スライム・パールだよ。たまに核が宝石みたいになることがある。高く売れるよ」

「本当ですか！ やったあ」

私は嬉しくなつて、それを日差しに掲げた。

数力所と同じようにスライム退治を終え、私たちは最初に焚き火をしたところに戻ってきた。

腰を下ろすと、太陽はもう高く昇りきつていて、すっかりお腹が減っていた。

「昼、食べようぜ」とライガが荷物をこそごそしはじめる。

「エイダンには食べないのか」

私たちが焚き火で干し肉を焼き直して野菜と一緒にパンに挟んで食べている横で、エイダン様は自分の荷物からノートを出して、熱心に書き留めていた。

「ああ……もう少し……忘れないうちにまとめてから食べる……」

なにを書いているんだろう。覗き込むと、『スライムの倒し方』というタイトルと図が描かれていた。……たぶん、鳥……のような絵もある。

「エイダン様……これ、鶏ですか？」

聞くと、エイダン様はがばっとノートを閉じてしまった。

「鶏以外のなにに見える」

「いえ……、鶏ですね」

不機嫌そうに睨まれたので、とりあえず微笑んでおいた。

「——本当に、やる気はあるんだね」

ステファンはそう呟くと、自分の荷物の中から一冊の分厚い本みたいなものを出して、エイダン様の前に置いた。

「なんだこれは？」

エイダン様はぱらぱらとそのページをめくる。
私も横から覗き込んだ。

『スライム』『ゴブリン』『蛇竜』スネイクドラゴン『マンドレイク』……。いろんな魔物の特徴や退治方法が、詳しい絵と一緒に細かく手書きで記されていた。

「すごいな」

「すごいですねえ」

私とエイダン様の声が重なる。ステファンは照れたように呟いた。

「貸すよ。僕のメモだけど。もしかしたら、参考になるかなって思って」

「これ、ステファンが書いたんですか！」

こんなの書いているなんて、知らなかった。むしろ私が読みたいくらい。

「次、読ませてください！」

そう言っつてステファンの手を取ると、ステファンは照れたように頭を掻いてから、エイダン様に視線をやった。

「次はレイラに貸すから、読むならさっさと読んでくれよ」



私たちはスライムの核がたくさん入った袋を持って、冒険者ギルドに戻った。

「エイダン様！ お帰りなさい！」

私たちがギルドのドアを開けるより先に、ハンナ様がエイダン様めがけて駆け出してきた。

「戻ったぞ、ハンナ。初めての魔物退治だったが、僕にかかればこんなものだ」

街用に人の姿に戻ったライガが、眉間に皺を寄せてハンナ様を見た。

「おい、ハンナ。お前、宿屋の仕事は？ 今、夕食時で食堂は忙しいはずだろ」

そういえば、エイダン様は冒険者、ハンナ様は宿屋で働くことになったんだった。

ハンナ様はぴたりと止まり、小さな声で呟いた。

「エイダン様をお迎えに、と思って……」

「女将さん、怒ると怖いぞ」

宿屋の手伝いをする人が多いライガが実感のこもった声で言うと、ハンナ様はびくつとした。それから回れ右をして、ぴゅーっと宿屋のほうに走っていった。

それを見送ってから、ナターシャさんがカウンターの奥から私たちに手を振る。

「お疲れ様。今日、アンタたち全員そろってるから、報酬を渡すついでに、少し話してもいい？」
手招きされて、私たちはカウンター奥の小部屋に入った。

「——この前、キアラについて聞きたいって言ったけど。エイダン、今、いい？」

報酬のお金を手渡しながら、ナターシャさんがエイダン様を見る。

「僕でわかることであれば、答える」

ナターシャさんは私を見た。

「大司教はレイラを親から引き取ったって言ってた。アンタはあいつがどこからこの子連れてきたか、なにか知ってる？」

スライム退治で疲れてぼんやりあくびをしていた私は、背筋を伸ばした。……私の話だった。慌てて表情を正した私の隣で、エイダン様は怪訝けげんそうな顔をしている。

「——大司教がレイラを親から引き取ったという話が嘘だと言いたいのか？　大神殿は昔から国内外から孤児を引き取って神官として育てている。キアーラの神殿は光神教こうしんきょうの大本山だから、国外からも参拝者は多いし、頼ってくる者もいるだろう」

エイダン様は苦笑した。

「僕は最初、レイラは大司教の私生児だと思っていた。神殿がいつの間にか聖女の役職を与えて祀り上げたものだから、僕はそこでようやく存在を知った。それから、大神殿で祈っている姿を遠目に見るくらいだった。……なのに大司教が勝手に婚約者に決めやがって、顔を見に行ったら子どもじゃないか。自分の子の年齢を偽いつわって、婚約者に仕立て上げたのではないかと思ったのだ」

「……そんな風に思われていたんですね。初耳です」

確かに私は神殿の中にこもっていて、王族や貴族の人と直接話す機会なんてなかったから、外から見たらそういう風に見えたかもしれない。ナターシャさんは腕組みをした。

「別に嘘だと思ってるわけじゃないよ。ただ、キアーラには冒険者ギルドがないから、内情がわからなくてね。たとえば、大司教がこの子をどこから買ったって可能性はない？　魔力の強い子どもが欲しいとかでさ」

「神殿が人を買うだと？　そんなことがあるわけ……いや」

エイダン様は途中で言葉を呑み込むと、しばらく黙ってから口を開いた。

「人の売買ではないが、大神殿には多額の金がある。最近になって予算の内訳を見るまで、僕も知らなかった。あいつら、国外の教会からの献金で独自の収入があるくせに、国の予算まで大量にせしめて贅沢ぜいたくをしているのかと思っていたが……」

悔しそうな表情で言ってから、私たちを見まわした。

「贅沢ぜいたくといつても、式典を派手にする程度では説明がつかない額だ。父上もその用途を知らなかった。……あいつら、なににそんな金をかけているのだから」

ナターシャさんは耳をいじりながら呟いた。

「推測でしかないけどね。大司教……怪しいんだよねえ」

胸がざわついた。私はポケットの中の水晶を、気づけば握りしめていた。

——やっぱり、私がどこから来たのかを知っているのは、大司教様だ。

第二章 元聖女はいなくなった子どもを取り戻します

——その頃、キアラ王国の王宮にて。

レイラを連れ戻せなかったという大司教の報告を受けた国王は、拳をわなわなと震わせて叫んだ。「聖女を連れ戻せなかっただど？ どうするのだ、ミハイル！ 地方の魔物被害は増える一方だと、今日も大臣から報告があった！ 私はどうしたらいいのだ……！」

「申し訳ございません」

ミハイルはすまなそうに頭を下げながら、内心では国王をあざ笑っていた。

（……本当に、国王様はどうしようもないお方で——素晴らしい）

ミハイルが国外追放し、危険な獣の出る夜道に放置してきた息子のことを、この国王は全く気にしていない。……気にしているのは、自分の保身だけだ。

しかも国王でありながら、なに一つ自分で考えず、『どうしたらいいか』と問うているのだ。

（……これほど扱いやすい王も、そうはいない）

ミハイルは口元がゆるむのを止められなかった。

「なにがおかしい！」

国王に一喝されて、ミハイルは慌てて口元を引き締めた。

（まずい、まずい。ついうっかり笑ってしまった。しかし——）

レイラ追放を直接言い渡したのは、王子エイダンだ。だからその責任を負わせるため、追放後に起きた魔物被害は、あえてしばらく放置していた。

だが報告される被害は日に日に大きくなっていて、このままでは王国全体に甚大な影響が出そうな勢いだ。

（レイラは戻ってこないと駄々をこねているし、ここは対応せねばな。国が荒れすぎて、使える金がないのは私も困る）

ミハイルは思考を巡らせる。

（——あれを実際に使ってみる、良い機会かもしれん）

心の中でうなずいてから、口を開いた。

「失礼いたしました、国王様。なにしろ、良い案が浮かんだもので」

「なんだ!? それは!? 話してみろ！」

ミハイルは真剣な表情を作り、国王に問いかけた。

「では、私についてきていただけますか？ お見せしたいものがございます」

ミハイルは国王を馬車に乗せ、王宮を出た。そして王都からも出て、どんどん遠くまで走っていく。

窓の外の景色が寂れていくのを見ながら、国王は不審げに問いかける。

「——どこへ向かっているのだ、ミハイル」

「今に着きます」

そう答えてからしばらくして、馬車は止まった。

「国王様、足元にお気をつけください」

先に降りたミハイルが、国王に手を貸す。国王はゆつくりと馬車を降り、周囲を見まわした。

「ここは……旧大神殿？」

荒涼とした丘の上には、白い石でできた古びた建物がある。

それは、すでに使われなくなった旧大神殿だった。

「大司教様、お待ちしていました」

旧大神殿から白い服の神官が数人、ミハイルと国王を出迎えに丘を下ってきた。

「あの子たちは、ちゃんと良い子にしているかね」

ミハイルの問いかけに神官はうなずく。

「問題ありません。みんな、大司教様を待つておりますよ」

「あの子たち？」

国王は訝しげに首をかしげた。

「ご覧になればわかります」

国王に後をついてくるよう促し、ミハイルは神官たちとともに旧大神殿へ歩き出す。

「国王様は、なぜ今までキアールに魔物が出なかったのか、おわかりになりますか？」

「それは、聖なる祈りの力で国を満たしていたからだろう」

「そうです。祈りの力は精霊力のバランスを整え、その荒ぶりを鎮め、魔物の発生を抑えます」

丘に登りながら、ミハイルはゆつくりと語りかけるように言葉を続けた。

「レイラを育てていて、私は考えたのです。大神殿で光の女神様の教えを授けたら、あの魔族の子どもが聖なる力を使えるようになった。ならば、この国の中で魔物を育てたらどうなるのか、と」

「魔物を、育てる？」

「そう。たとえば、竜の卵を温めたら？ 竜は危険な魔物です。だから、卵は孵らないのでしょうか？ それとも、魔物らしさ——人を襲う凶暴さがなく可愛らしい動物が孵るのでしょうか？」

かつては真っ白に輝いていた、今は土埃で黒ずんだ旧大神殿——二人は神官たちとともに、その入り口の階段を上った。

「これは……！」

上りきったところで、国王は大きく目を見開いた。そこには——

——ガアアアアア！

十頭のさまざまな色の竜が、そこにいた。

さらに竜たちはミハイルの姿を見て、まるで猫が喉を鳴らすように嬉しそうに吠える。

入り口の近くに繋がれた赤い鱗の竜が一頭、擦り寄るようにミハイルのそばへ近づいた。

竜の首に巻かれた鎖が、じゃらりと鳴る。国王は「ひっ」と息を吸い込んで後ずさりした。

「ミハイル、これはどういうことだ？ この竜たちはどこから？」

「各地から竜の卵を取り寄せました。前々から、私はこの国の防衛力の乏しさに危機を覚えており

ましてな」

「よしよし」と笑うように牙を見せる竜の顎下を撫でながら、ミハイルは語り出した。

「——今、世界は魔法使いどもの支配下にあります。やつらは神の存在を否定し、精霊の力を好き勝手に使い、各国に入り込んでいます。そして、自分たちの意のままに世界を動かしているのです」

ミハイルは語気を強めた。

「このままでは我が国も同様に、魔法使いどもに乗っ取られてしまうでしょう。自分たちの身は自分で守る必要がごさいます」

「そのために竜を？」

「はい。兵士だけでは足りない。人の力では、限界がある——だから、より強い力を使うのです」
ミハイルは竜の上にまたがると、首に繋がれていた鎖を外した。

驚きと恐怖で硬直したままの国王の横を、ミハイルは竜に乗ってゆっくり通り過ぎる。

そしてそのまま、旧大神殿の外へ駆け出した。屋外に出られたことが嬉しいのか、竜は吠え声を上げて首を左右に振る。その額の鱗を撫でて、ミハイルは命じた。

「ファイアブレス！」

竜は吠え声とともに口を大きく広げた。炎の渦が吹き出され、周囲の草を燃やした。

「大司教様、火事になります!!」

慌てた神官が、奥にいた青緑の鱗の、蛇のような龍——水龍の鎖を引っ張って追いかけた。神官が水龍の首を燃え上がる原っぱに向けると、空中に大きな水の塊が浮き上がり、炎に向かって勢い

よくぶつかった。燃え広がっていた炎は消え、水の勢いで土が抉れて大きな穴が開いた。

「……」

一部始終を目の当たりにした国王は、信じられない——というように瞬きを繰り返した。

「まったく。あのわがまま娘より、よほど聞き分けがいい」

ミハイルは「はあ」と大げさな溜め息をつく。国王に向き直った。

「魔物には魔物を。国王様に許可をいただければ、私めがこの子たちを使って地方の魔物討伐をいたしましょう。よろしいですね？」

国王はごくりと喉を鳴らした。

——竜を使う？ それで大丈夫なのか？

いや、もしそれで問題が起きて、責任はミハイルにある。

「問題が片づくなら、なんでもいい！」

首を縦に振ると——ミハイルは笑みを浮かべて、言葉が続けた。

「では、兵士とともに魔物討伐に赴きます。兵士たちの指揮は、全て、私にお任せください」



——キアラ王国北端の村。

家から飛び出した農民たちは、空を横切る巨大な鳥のような影を見上げた。

「——なんだ、あれ？」

「鳥……？ いや、違う、竜だ!! 今度は空から魔物が来たぞ!!」

村に向かって降下してくる複数の竜を見て、村人たちは鍬や斧を掴み、我先にと騒ぎ立てた。赤い鱗の竜がどすんと土埃を立てて、教会前の広場に着陸する。

「はははは、飛ぶのは初めてだが、なかなか楽しい。馬など比べものにならない」

竜の首に巻いた鎖の手綱を離し、ミハイルは笑いながらその背から降りた。

「——大司教様!？」

教会の中から、痩せ細ったこの村の神官——ジェイコブが飛び出してきて、竜とミハイルを驚いた顔で見比べた。

続けて、白い服の神官が乗った青や黄色の鱗の竜が着陸し、周囲は砂埃に包まれた。

ミハイルは手で埃を払うとジェイコブを見つめる。

「お前は、この村の神官の……ジェイコブだな。確か、私の召集に応じず村に残ったのだったか。……まあいい。そのおかげでこの村はまだ使えそうだ。拠点に使わせてもらうぞ」

「な、なにを勝手な……! 拠点とは一体なんのことですか!？」

「魔物退治の拠点だよ」

なにをわかりきったことを、と苦笑するミハイルに詰め寄り、ジェイコブはその肩を掴んだ。

「——どういうことです。その竜は一体？ それに、なぜ周辺の村々の神官を中央に召集してしまったのですか！ そのせいで、家族を、田畑を、家畜を魔物に奪われた者が大勢いるのです！」

「王都を優先して護るのは当然だろう？ それに我々の祈りの力がなければどうなるのか、能天気なキアラの民どももようやく思い知ったはずだ。……それより、手を離しなさい」

ミハイルは小声で囁き、ジェイコブの手を払いのけて、溜め息をついた。

いつの間にか周囲には村人の人だかりができていた。

彼らは一瞬顔を見合わせ、やがて、安堵したように顔を輝かせた。

「大司教様!？」

「大司教様がいらっしゃったぞ!!」

「皆さん——無能な王子が聖女を追い出したせいで魔物に苦しめられ、さぞお辛かったでしょう」

ミハイルは服を正すと、周りを取り囲む村人一人一人の顔をじっと見つめながら、慈愛に満ちた口調で語りかけた。

「国王様も貴族たちも、あなた方よりも自分たちの身を案じた。だから我々神官は王都へ集められたのです。ですが私たちはそれを振り切り、兵士たちよりも早く、誰よりも先に、一番困っている皆様のもとへ駆けつけました」

ミハイルは竜の頭を撫でながら、言葉を続けた。

「この竜たちは、今やあなたの方の味方です。恐れることはありません」

村人たちからは「大司教様!」と感嘆の声が漏れた。

「私たちは、光の女神様のお力によって、竜を善き存在へと変えました。この子たちはあなた方を魔物の脅威から守ってくれます。私たちこそが、あなた方を救います」

自然と拍手が起こった。ミハイルはその音を、当然ように受け止めて微笑んだ。
(今や、この国は——私のものだ)



——その頃、マルコフ王国王都。宮殿では、大規模な修理工事が行われていた。国中から集められた大工たちの中に、一人、獣の耳を持つ少年がいる。南端の街の冒険者ギルド所長ナターシャの息子、ノアだ。親方に連れられ、大工見習いとして宮殿の修理に参加していた。

「あいつ、獣人のくせに、大工の真似事か？」

他の大工見習いの少年たちの呟きに、ノアの耳がぴくりと動き、ゆっくり振り返った。

「——今、なにか言ったか？」

少し年上の少年たちは、手のひらを頭の上にくっつけ、獣人の耳を表す形を作った。

「人の話を、盗み聞きしてんじゃねえよ」

「怖え、ひつかかれたら、どうしょよ！」

「——獣人ってすぐキレルよな。そんなんでも細かい仕事できんのかよ」

「……」

ノアがぎりつと拳を握りしめたところで、頭上から親方の声が降ってきた。

「ノア、五番と十二番のノミを持ってきてくれないか」

親方は今、組んだ足場の上で作業していた。

ノアはさつと工具箱から道具を取り出し、上に向かって大声で返事をする。

「すぐ持っていきます！」

そのまま跳び上がって足場に手をかけた。他の大工見習いの少年たちが瞬きをする間に、一番上まで一気に駆け上がる。少年の一人は思わず「すっげー……」と感嘆の声で呟いた。

工具を渡すと、親方は下の少年たちを見ながら、たしなめるような優しい口調で言った。

「——気にするな、ノア。今回は各地から職人が呼ばれてるから、いろいろなやつがいるのさ。怒っても、喧嘩はだめだぞ。先に手を出したら負けだからな」

「聞こえてたんですか……。わかってます」

ノアは「ちつ」と舌打ちしながら答えた。

王都に来ていくらか経ち、「獣人が大工？」と言われるのにも慣れてきた。

最初そう言われた時は、相手がなにを言いたいのかわからなくてぼかんとしてしまった。しかし、しばらくするうちに、だんだんと事情がわかってきた。

南端の街には獣人が多い。レストランの料理人や花屋など、いろいろな仕事に就く獣人を当たり前に見てきたので意識したことはなかったが——街の外では、それは珍しいことだったのだ。

王都でも獣人は見かけるが、たいていは荷車を引く下働きだ。道具を使い、職人として働く獣人は珍しい存在だった。

「よし、じゃあレリーフを飾るか」